

教師とカウンセラーのための心理教育プログラム

―いじめ克服への実践ガイド―

はじめに

最近ではマスコミが直接に取り上げることが少なくなったためか、いじめは教育問題としては下火になった印象を受ける。しかし、昨年から今年にかけて名古屋で中学生が長期間にわたって同級生らから暴力を受けたり、5千万円を越す多額の現金を脅し取られる事件も発生している。最近の世論調査などでも、子どもの教育についての心配事としては、「いじめ」をあげたものが最も多く（48%）、「しつけ」36%、「教師の姿勢や資質」35%、「不登校・引きこもり」34%などがこれに続いている（読売新聞）。いじめの問題が決して根本的に解決していないことは明白である。また、いじめは子どもだけに責めを負わせて済まされる問題ではないことも、衆目の一致するところとなりつつある。

東京大学学校臨床総合教育研究センターの第1期プロジェクト「いじめ問題の解明と解決策の探求」（平成9年度11年度）が終了するにあたり、報告書の一つとして『教師とカウンセラーのための心理教育プログラム―いじめ克服への実践ガイド』をまとめることになった。本報告書は、相談援助部門のスタッフを中心として協力研究者や教育学研究科大学院生、東大附属学校の教官、あるいは関係分野の他大学教官にも協力をいただき、短時日に完成をみたものである。本報告書の特徴は、狭義の研究報告書ではなく、今後も各学校で取り組まれるであろう、いじめ克服に向けた各種の実践に役立つガイドブックとしての体裁を取ったところにある。本報告書の題名にも明示したように、本報告書の主たる読者としては研究者よりも、むしろ学校現場で日々子ども達に接している教師や学校カウンセラーの方々を想定している。しかし、教員養成学部の教官や臨床心理士あるいはカウ

ンセラー養成の任に当たっておられる学部・大学院の教授陣の方々にも、参考にしていただける部分があるのではないかと期待している。

21世紀の学校が、ひとり一人の子どもの潜在的な可能性を最大限に伸ばしていけるような「学びの場」として再生できるように、われわれのささやかな試みが一助となることを願ってやまない。知的好奇心に満ち、学びの喜びを体験する若者の存在なしに、その社会の生き生きとした活力が維持できるとは、とうてい考えられないからである。そのためには、指導にあたる教員が絶えず自己変革の努力を続け、他の優れた教育実践に関心を向けていくことが求められる。いまほど学校現場と大学や教育研究機関に籍をおく心理・教育分野の研究者との間の「真の連携」が必要かつ有効な時期はないのではないだろうか。お互いのこころの垣根を取り除き、優れた実践に向けた協働作業（コラボレーション）を粘り強く続けることによって、学校に活気を呼び戻すことは決して不可能ではないはずだ。家庭や地域社会との連携も、まず学校内部の連携の確立があってこそであり、それなしに外部への支援を要請しても、責任転嫁のそしりを免れることはできないだろう。

また、生徒と教師の双方にとってストレスは、学校におけるメンタルヘルスの中心課題であり、いじめの問題ともつながる重要性を有している。本書のテーマである、「心理教育」はこの課題に大きな比重をかけている。すでにストレスをかかえて苦しんでいる読者の方には、適切にストレスに対処したり、思いきって自己表現をするアサーション訓練の方法が、具体的な解決策として役立つことを期待したい。

（編者 亀口憲治）